

中島敦

悟淨歎異



悟ご淨じょう歎たん異に

—
沙しや門もん悟淨ごじょうの手記
—

昼餉ひるげの後、師父が道傍みちばたの松まつの樹の下でしばらく憩いこうて
 おられる間、悟空ごくうは八戒はっかいを近くまっの原はらっぱに連出して、変
 身の術の練習をさせていた。

「やってみろ！」と悟空が言う。「龍りゅうになりたいと本
 当に思うんだ。いいか。本当にだぜ。この上無しの、突つ
 きつめた気持で、そう思うんだ。ほかの雑念はみんな棄す
 ててだよ。いいか。本気にだぜ。この上なしの・とこと
 心の・本気にだぜ。」

「よし！」と八戒は眼を閉じ、印を結んだ。八戒の姿が消え、五尺ばかりの青大将が現われた。傍で見ていた俺は思わず吹出してしまった。

「莫迦！ 青大将にしか成れないのか！」と悟空が叱つた。青大将が消えて八戒が現われた。「駄目だよ、俺は。全くどうしてかな？」と八戒は面目無げに鼻を鳴らした。

「駄目駄目。てんで気持が凝らないんじゃないか、お前は。もう一度やってみろ。いいか。真剣に、かけ値無し
の真剣になって、龍に成りたい龍に成りたいと思うんだ。
龍に成りたいという気持だけになって、お前というもの

が消えてしまえばいいんだ。」

よし、もう一度と八戒は印を結ぶ。今度は前と違ちがって
 奇怪きかいなものが現まわれた。錦蛇にしきへびには違ちがいが、小さな
 前肢まえあしが生まえていて、大蜥蜴おおとかげのようでもある。しかし、腹
 部は八戒自身に似てブヨブヨ膨ふくれており、短い前肢で二、
 三步は匍はうと、なんとも云えない無ぶ恰かつこう好こうさであった。俺は
 またゲラゲラ笑わらえてきた。

「もういい。もういい。止やめろ！」と悟空が怒ど鳴なる。頭
 を搔かき搔かき八戒が現まわれる。

悟空。お前の龍に成なりたいという気持きもちが、まだまだ突つき詰つ

めていないからだ。だから駄目なんだ。

八戒。

そんなことはない。これほど一いつしやうけんめい生懸命に、龍に

成りたい龍に成りたいと思いつめているんだぜ。

こんなに強く、こんなにひたむきに。

悟空。

お前にそれが出来ないという事が、つまり、お前

の気持の統一がまだ成っていないということになるんだ。

八戒。

そりやひどいよ。それは結果論じゃないか。

悟空。

なるほどね。結果からだけ見て原因を批判するこ

とは、決して最上のやり方じゃないさ。しかし、

この世では、どうやらそれが一番實際的に確かな方法のようだぜ。今のお前の場合なんか、明らあきかにそうだからな。

悟空によれば、変化の法とは次のごときものである。すなわち、あるものに成りたいという気持が、この上無く純粹に、この上無く強烈きょうれつであれば、ついにはそのものに成れる。成れないのは、まだその気持がそこまで至っていないからだ。法術の修行とは、かくのごとくおのれ己の気持を純一無垢むく、かつ強烈なものに統一する法を学ぶ

に在る。この修行は、かなりむずかしいものには違いな
いが、いったんその境に達した後は、もはや以前のよう
な大努力を必要とせず、ただ心をその形に置くことによ
って容易に目的を達し得る。これは、他の諸芸こりにおける
と同様である。変化の術が人間に出来ずして狐狸こりに出来
るのは、つまり、人間には関心すべき種々の事柄ことが余り
に多いが故に精神統一が至難であるに反し、野獸やじゆうは心を
労すべき多くの瑣事さじを有もたず、従ってこの統一が容易だ
からである、云々うんぬん。

悟空ごくうは確かに天才だ。これは疑い無い。それは初めて
 この猿さるを見た瞬間しゆんかんにすぐ感じ取られたことである。初
 め、赭顔しやがん・鬚面しゆめんのその容貌ようぼうを醜みにくいと感じた俺も、次の
 瞬間には、彼かれの内から溢あふれ出るものに圧倒あつとうされて、容貌
 のことなど、すっかり忘れてしまった。今では、時にこ
 の猿の容貌を美しい（とは云えぬまでも少くとも立派だ）
 とさえ感じる位だ。その面魂つらだましいにもその言葉つきにも、
 悟空が自己に對して抱いだいている信頼しんらいが、生々いきいきと溢あふれてい
 る。この男は嘘うそのつけない男だ。誰だれに對してよりも、ま
 ず自分自分に對して。この男の中には常に火が燃えている。

豊かな、激しい火が。その火はすぐに傍うちにいる者に移る。彼の言葉を聞いている中うちに、自然に此方も彼の信ずる通りに信じないではいられなくなつて来る。彼の側そばにいただけで、此方までが何か豊かな自信みに充ちて来る。彼は火種。世界は彼のために用意まきされた薪。世界は彼によつて燃されるために在る。

我々にはなんの奇異もなく見える事柄も、悟空の眼から見ると、ことごとく素晴らしい冒険の端緒たんちよだったり、彼の壮烈そうれつな活動を促うながす機縁きえんだったりする。もともと意味を有もつた外の世界が彼の注意を惹ひくというよりは、む

しろ、彼の方で外の世界に一つ一つ意味を与^{あた}えて行くよ
 うに思われる。彼の内なる火が、外の世界に空^{むな}しく冷え
 たまま眠^{ねむ}っている火薬に、一々点火して行くのである。
 探^{たんでい}偵の眼をもつてそれらを探し出すのではなく、詩人の
 心をもつて（恐^{おそ}ろしく荒^{あら}っぽい詩人だが）彼に触^ふれるす
 べてを温^{あた}め、（時に焦^こがす惧^{おそ}れも無いではない。）そこ
 から種々な思い賭^がけない芽を出させ、実を結^{むす}ばせるのだ。
 だから、かれ・悟空の眼にとって平^{へい}凡^{ぼん}陳^{ちん}腐^ぷなものは何一
 つ無い。毎日早朝に起きると決^きって彼は日の出を拝^{をら}み、
 そして、始めてそれを見る者のような驚^き嘆^{よう}をもつてそ

の美に感じ入っている。心の底から、溜息ためいきをついて、讚嘆さんたんするのである。これがほとんど毎朝のことだ。松の種子から松の芽の出かかっているのを見て、何たる不思議さよと眼を瞠みはるのも、この男である。

この無邪気むじやきな悟空の姿と比べて、一方、強敵と闘たたかっている時の彼を見よ！ 何と、見事な、完全な姿であるう！ 全身いささかの隙すきもない逞たくましい緊張きんちよう。律動的で、しかも一分いちぶの無駄も無い棒の使い方。疲れつかを知らぬ肉体が歓びよろこび・たけり・汗あせばみ・跳はねている・その圧倒的な力量感。いかなる困難をも欣よろこんで迎むかえる強靱きようじんな精神力

の横溢おういつ。それは、輝かがやく太陽よりも、咲誇さきほこる向日葵ひまわりよりも、鳴盛なきさかる蟬せみよりも、もっと打込んだ・裸身らしんの・壮さかんな
 ・没ぼつ我的がてきな・灼熱しやくねつした美しさだ。あのみつともない猿
 の闘ひとつきっている姿は。

一月ひとつきほど前、彼すいが翠雲山さんちゆう中で大いに牛魔王ぎゆうと戦まつ
 た時の姿は、いまだにはつきり眼底せんとうに残くわっている。感嘆
 の余り、俺おれはその時の戦闘経過せんとうを詳くわしく記録きろくに取とってお
 いた位だ。

……牛魔王びき一匹この香獐しょうと変ゆじ悠然ぜんとして草くを喰らい
 いたり。悟空ごくうこれを悟さとり虎とらに變かじ駈かけ来きりて香獐しょうを

喰わんとす。牛魔王急にだいひょう大豹と化して虎を撃うたんと
 と飛び掛かる。悟空これを見てからしし狻猊となり大豹目掛
 けて襲おそいかかれば、牛魔王、さらばとこうし黄獅にへきれき変じ霹靂
 のごとくに哮うなってひきさ狻猊を引裂かんとす。悟空この時
 地上にてんとどう転倒すと見えしが、ついに一匹の大象となる。
 鼻は長蛇ちようだのごとく牙はきば筍たかなに似たり。牛魔王堪たえか
 ねて本相をあらわ顕し、たちまち一匹の大白牛たり。頭
 は高峯こうほうのごとく眼はらいこう電光のごとくそうかく双角はせんよじよう両座のてつとう鉄塔
 に似たり。頭より尾おに至る長さ千余丈、ひづめ蹄より背
 上に至る高さ八百丈。大音に呼ばわっていわ曰く、なんじ爾

悪わる猴さる今我をいかんとするや。悟空また同じく本相を
 顕だいかつし、大喝だいかつ一声するよと見るまに、身の高さ一万丈、
 頭かしらは泰山たいざんに似て眼は日月のごとく、口は恰あたかも血池
 にひとし。奮然鉄棒を揮ふるつて牛魔王を打つ。牛魔王角つの
 をもつてこれを受止め、兩人半山の中にあつて散々
 に戦いければ、まことに山も崩くずれ海も湧返わきかえり、天地
 もこれがために反はん覆ぷくするかと、すさまじかり。……
 何という壯そう観かんだつたらう！ 俺おれはホツと溜息を吐つい
 た。傍すけから助太刀だちに出ようという気も起こらない。孫そん
 行者ぎやうじやの負ける心配が無いからというのではなく、一幅ぷく

の完全な名画の上に更にさら拙つたない筆を加えるのを愧はじる気持からである。

災厄さいやくは、悟空ごくうの火にとって、油である。困難に出会う時、彼の全身は（精神も肉体も）焰えん々と燃上る。逆に、平穩無事へいおんぶじの時、彼は可笑おかしいほど、しよげている。独楽こまのように、彼は、いつも全速力で廻まわっていなければ、倒たおれてしまうのだ。困難な現実も、悟空にとって、一つの地図——目的地への最短の路みちがハッキリと太く線を引かれた一つの地図として映るらしい。現実の事態の認識

と同時に、その中であって自己の目的に到達すべき道が、
 実に明瞭に、彼には見えるのだ。あるいは、その途以
 外の一切が見えない、といった方が本当かも知れぬ。闇夜
 の発光文字のごとくに、必要な途だけがハッキリ浮かび
 上がり、他は一切見えないのだ。我々鈍根のものがいま
 だ茫然として考えも纏まらない中に、悟空はもう行動を
 始める。目的への最短の道に向って歩き出しているのだ。
 人は、彼の武勇や腕力を云々する。しかし、その驚く
 べき天才的な智慧については案外知らないようである。
 彼の場合には、その思慮や判断が余りにも渾然と、腕力

行為こういの中に溶とけ込んでいるのだ。

俺おんは、悟空もんこうの文盲もんもうなことを知っている。かつて天上でひつぱおん 弼馬温うまかたなる馬方うまかたの役に任まかせられながら、弼馬温の字も知らなければ、役目の内容も知らないでいたほど、無学なことを良く知っている。しかし、俺は、悟空の（力と調和まされた）智慧と判断の高さとを何ものにも優まして高く買う。悟空は教養が高いとさえ思うこともある。少くとも、動物・植物・天文たいていに関する限り、彼の智識は相当なものだ。彼は、大抵たいていの動物なら一見してその性質、強さの程度、その主要な武器の特とくちよう徴とくちようなどを見み抜ぬいてしまう。

雑草についても、どれが薬草で、どれが毒草かを、実に
 良く心得ている。その癖くせ、その動物や植物の名称（世間
 一般いっぽんに通用している名前）は、全然まる知らないのだ。彼は
 また、星によつて方角や時刻や季節を知るのを得意とし
 ているが、角宿かくしゆくという名も心宿しんしゆくという名も知りはしな
 い。二十八宿の名をことごとくそらんじていながら実物ほんもの
 を見分けることの出来ぬ俺と比べて、何という相異だろ
 う！ 目いっていに一丁字じの無いこの猴さるの前さるにいる時ほど、文字
 による教養の哀れあわさを感じさせられることはない。

悟空の身体からだの部分部分は——目も耳も口も脚あしも手も
 ——みんないつも嬉うれしくて堪たまらないらしい。生々いきいきとし、
 ピチピチしている。殊ことに戦う段になると、それらの各部
 分は歡喜の余り、花にむらがる夏の蜂はちのように一斉いつせいにワ
 アーツと歡声を挙げるのだ。悟空の戦いぶりが、その真
 剣きな氣魄はくにもかかわらず、どこか遊戯ゆうげの趣おもむきを備えてい
 るのは、このためであろうか。人はよく「死ぬ覚悟かくごで」
 などと云うが、悟空という男は決して死ぬ覚悟なんかし
 ない。どんな危険おちいに陥おちいった場合でも、彼はただ、今自
 分のしている仕事ようかい（妖怪を退治するなり、三蔵法師を救

い出すなり)の成否を憂^{うれ}えるだけで、自分の生命のこと
 などは、てんで考えの中に浮かんで来ないのである。太^{たい}
じょうろうくん 上老君の八卦^{はっけろちゆう}炉中に焼殺されかかった時も、銀角大王^{ぎんかく}
たいざんあつちよう の泰山^{たいざん}庄頂^{あつちよう}の法に遭^あうて、泰山・須弥山^{しゆみせん}・峨眉^{がびさん}山の三
 山の下に圧^おし潰^{つぶ}されそうになった時も、彼は決して自己
 の生命のために悲鳴を上げはしなかった。最も苦しんだ
 のは、小雷音寺^{こうびろうぶつ}の黄眉老仏^{こうびろうぶつ}のために不思議な金^{きん}鐺^{によう}の下
 に閉じ込められた時である。推せども突けども金鐺は破
 れず、身を大きく変化させて突破ろうとしても、悟空の
 身が大きくなれば金鐺も伸^のびて大きくなり、身を縮めれ

ば金鑊もまた縮まる始末で、どうにも仕様がなない。身の
 毛を抜いて錐きりと変じ、これで穴を穿うがとうとしても、金鑊
 には傷一つ付かない。その中うちに、ものを蕩とろかして水と化
 するこの器の力で、悟空の臀部でんぶの方がそろそろ柔やわらかくな
 り始めたが、それでも彼はただ妖怪に捕とらえられた師父の
 身の上ばかりを氣遣きづかっていたらしい。悟空には自分の運
 命に対する無限の自信があるのだ（自分ではその自信を
 意識していないらしいが。）やがて、天界から加勢に來
 た亢こう金龍きんりようがその鉄のごとき角つをもつて満身の力をこめ、
 外から金鑊きんにようを突通つきとおした。角はみごとに内まで突通った

が、この金鏡はあたかも人の肉のごとくに角に纏まといついで、少しの隙も無い。風の洩もるほどの隙間でもあれば、悟空は身をけい粒つぶと化して脱のがれ出るのだが、それも出来ない。半なかば臀部は溶けかかりながら、苦心さんたん惨憺の末、ついに耳の中から金箍棒きんそくぼうを取出して鋼鑽きりに変え、金龍の角の上に孔あなを穿ち、身を芥子粒けしつぶに変じてその孔あなに潜ひそみ、金龍に角を引抜かせたのである。ようやく助かった彼は、柔くなつた己おのれの尻しりのことを忘れ、すぐさま師父の救い出しに掛かるのだ。後になつても、あの時は危なかつたなどと決して言ったことが無い。「危ない」とか「もう

だめだ」とか、感じたことが無いのだろう。この男は、自分の寿命じゆみようとか生命とかについて考えたことも無いに違いない。彼の死ぬ時は、ポクンと、自分でも知らずに死んでいるだろう。その一瞬いつしゆん前までは潑刺はつらつと暴れ廻あばっているに違いない。全く、この男の事業は、壮大という感じはしても、決して悲壮な感じはしないのである。

猿は人真似ひとまねをするというのに、これはまた、何と人真似をしない猴さるだろう！ 真似どころか、他人から押付おしけられた考えは、たといそれが何千年の昔むかしから万人に認

められている考え方であっても、絶対に受付けけないのだ。
 自分で充分じゆうぶんに納得なつとくできない限りは。

因襲いんしゆうも世間的名声もこの男の前には何の権威けんいも無い。

悟空の今一つの特徴は、けっして過去を語らぬことである。というより、彼は、過去すきさった事は一切忘れてしま
 うらしい。少くとも個々の出来事は忘れてしまうのだ。
 その代り、一つ一つの経験の与えた教訓はその都度つど、彼の血液の中に吸収され、直ちに彼の精神及び肉体およの一部と化してしまふ。今更、個々の出来事を一つ一つ記憶きおくし

ている必要はなくなるのである。彼が戦略上の同じ誤あやまりを決して二度と繰返くりかえさないのを見ても、これは判わかる。しかも彼はその教訓を、いつ、どんな苦い経験によつて得たのかは、すっかり忘れ果てている。無意識の中うちに体験を完全に吸収する不思議な力をこの猴は有もっているのだ。

但ただし、彼にも決して忘れることの出来ぬ怖おそろしい体験がたった一つあった。ある時彼はその時の恐ろしさを俺に向つてしみじみと語つたことがある。それは、彼が始

めて釈迦如来しやくかによらいに知遇ちぐうし奉たてまつった時のことだ。

その頃ころ、悟空は自分の力の限界を知らなかつた。彼が藕糸歩雲ぐうしほうんの履はきものを穿はき鎖子黄金さしおうごんの甲よろいを着け、東海竜王から奪うばった一万三千五百斤きんの如意金箍棒にょいを揮ふるつて闘たたかう所ところ、天上にも天下にもこれに敵する者が無いのである。列仙れつせんの集まる蟠桃会ぱんとうえを擾さわがし、その罰ばつとして閉じ込められた八卦炉はくぱろをも打破た破はつて飛出とすや、天上界てんじやうも狭せましとばかり荒れ狂くるうた。群ぐんがる天兵てんぺいを打倒うちたおし薙なぎ倒たおし、三十六員さんじゅうろくゑんの雷将らいじやうを率らついた討手うっての大將たいじやう祐聖真君ゆうせいしんくんを相手に、靈霄殿れいしやうでんの前に戦たたかうこと半日余はんじつあまり。その時ちようど、迦葉かしやう・阿難あなん

の二尊者を連れ、た釈迦牟尼如来がそこを通りかかり、悟
 空の前に立ち塞がって鬪いを停めたもうた。悟空が怫然
 として喰って掛かる。如来が笑いながら言う。「大層威張
 っているようだが、一体、お前はいかなる道を修し得た
 というのか？」悟空曰く「東勝神州傲来国華果山に石
 卵より生まれたるこの俺の力を知らぬとは、さてさて愚
 かな奴。俺は既に不老長生の法を修し畢り、雲に乗り風
 に御し一瞬に十万八千里を行く者だ。」如来曰く、「大
 きなことを言うものではない。十万八千里はおろか我が
 掌たなごころに上って、さて、その外へ飛出すことすら出来ま

いに。「何を！」と腹を立てた悟空は、いきなり如来の掌の上に跳り上った。「俺は通力によつて八十万里を飛行するのに、なんじ爾の掌の外に飛出せまいとは何事だ！」言いも終らずきんとうん筋斗雲に打乗つてたちまち二三十万里も来たかと思われる頃、赤く大いなる五本の柱を見た。かれはこの柱の許もとに立寄り、まんなか真中の一本に、齊天大聖到此一遊とすみ墨くろぐるど書きしるした。さて再び雲に乗つて如来の掌に飛帰り、とくとく得々として言った。「掌どころか、既に三十万里の遠くに飛行して、ひぎょう柱にいるいを留めて来たぞ！」「愚かな山猿よ！」と如来は笑つた。「なんじ汝の通力

がそもそも何事を成し得るといふのか？ 汝は先刻から

我が掌の内を往返したに過ぎぬではないか。嘘うそと思わば、

この指を見るがよい。」悟空が異あやしんで、よくよく見れ

ば、如来の右手の中指に、まだ墨痕ぼつこんも新しく、斉天大聖

到此一遊と己の筆跡ひつせきで書き付けてある。「これは？」と

驚いて振仰ふりあおぐ如来の顔から、今までの微笑びしょうが消えた。急

に嚴肅げんしゆくに変わった如来の目が悟空をキツと見据みすえたまま、

たちまち天をも隠かくすかと思われるほどの大きさに拡ひろがつ

て、悟空の上のし掛かつて来た。悟空は総身の血が凍こお

るような怖しさを覚え、慌あわてて掌の外へ跳とび出そうとし

た途端とたんに、如来が手をひるがえ翻して彼を取抑とりおさえ、そのまま五指を化して五行山ごぎようざんとし、悟空をその山の下に押込め、
 唵嘛呢叭咪吽おんまにはつめいうんの六字を金書して山頂に貼はりたもうた。世界が根柢こんていから覆くつがえり、今までの自分が自分でなくなつた
 ような昏迷こんめいに、悟空はなおしばらく顫ふるえていた。事実、
 世界は彼にとってその時以来一変したのである。爾後じご、餓う
 うる時は鉄丸を喰くらい、渴かつするときは銅汁どうじゆうを飲んで、岩窟がんくつ
 の中に封ふうじられたまま、贖罪しよくざいの期みの充みちるのを待たね
 ばならなかつた。悟空は、今までの極度の増上慢ぞうじようまんから、
 一転して極度の自信の無さに墮おちた。彼は気が弱くなり、

時には苦しみの余り、恥はじも外聞も構わずワアワアと大声で哭ないた。五百年経たって、天竺てんじくへの旅の途中にたまたま通り掛かった三蔵法師が五行山頂の呪符じゆふを剥はがして悟空を解き放ってくれた時、彼はまたワアワアと哭いた。今度のは嬉うれし涙なみだであつた。悟空が三蔵にしたがって遙々はるばる天竺までついて行こうというのも、ただこの嬉しさ有難さからである。実に純粹で、かつ、最も強烈な感謝であつた。

さて、今にして思えば、釈迦牟尼によつて取抑えられた時の恐怖きようふが、それまでの悟空の・途方とほうも無く大きな

（善悪以前の）存在に、一つの地上的制限を与えたもの
 のようである。しかもなお、この猴さるの形をした大きな存
 在が地上の生活に役立つものと成るためには、五行山の
 重みの下に五百年間押し付けられ、小さく凝ぎ集ようしゆうする必
 要があったのである。だが、凝固して小さくなった現在
 の悟空が、俺達たちから見ると、何と、段違いに素晴らしく
 大きく見事であることか！

三蔵法師は不思議な方かたである。実に弱い。驚くほど弱
 い。変化の術ももとより知らぬ。途みちで妖怪に襲われれば、

すぐに掴つかまってしまおう。弱いというよりも、まるで自己防衛の本能が無いのだ。この意い気く地じの無い三蔵法師に、我々三人が齊ひとしく惹ひかれていますというのは、一体どういう訳だろうか？（こんな事を考えるのは俺だけだ。悟空も八戒もただ何となく師父を敬愛しているだけなのだから。）私は思うに、我々は師父のあの弱さの中に見られるある悲劇的なものに惹かれるのではないか。これこそ、我々・妖怪からの成上り者には絶対に無い所のものなのだから。三蔵法師は、大きなものの中における自分の（あるいは人間の、あるいは生物いきものの）位置を——その哀れさ

と貴さをハッキリ悟っておられる。しかも、その悲劇性に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢ゆうかんに求めて行かれる。確かにこれだ、我々に無くて師に在るものは。なるほど、我々は師よりも腕力がある。多少の変化の術も心得ている。しかし、いったん己の位置の悲劇性を悟ったが最後、金輪際こんりんざい、正しく美しい生活を真面目まじめに続けて行くことが出来ないに違いない。あの弱い師父の中にある・この貴い強さには、全く驚嘆の外は無い。内なる貴さが外の弱さに包まれている所に、師父の魅力みりよくがあるのだと、俺は考える。もっとも、あの不埒ふらちな八戒の解釈に

依れば、俺達の——少くとも悟空の師父に対する敬愛の中には、多分に男色的要素が含まれて（ふく）いるというのだが。

全く、悟空のあの実行的な天才に比べて、三蔵法師は、何と実務的には鈍物（どんぶつ）であることか！ だが、これは二人の生きることの目的が違うのだから問題にはならぬ。外面的な困難にぶつかった時、師父は、それを切抜ける途を外に求めずして、内に求める。つまり自分の心をそれに耐え（た）得るように構えるのである。いや、その時慌（どろ）てて構えずとも、外的な事故によって内なるものが動揺（どうよう）を受けないように、平生（へいぜい）から構えが出来てしまっている。い

つどこで窮死きゆうししてもなお幸福であり得る心を、師は既に作り上げておられる。だから、外に途を求めする必要が無いのだ。我々から見ると危なくて仕方の無い肉体上の無防禦むぼうぎよも、つまりは、師の精神にとって別に大した影響えいきようは無いのである。悟空の方は、見た眼にはすこぶる鮮あざこやかだが、しかし彼の天才をもつてしてもなお打開できないような事態が世には存在するかも知れぬ。しかし、師の場合にはその心配は無い。師にとっては、何も打開する必要が無いのだから。

悟空には、嚇怒かくどはあっても苦惱くのうは無い。歡喜あつこはあつて

も憂愁ゆうしゆうは無い。彼が単純にこの生を肯定こうていできるとに何の不思議もない。三蔵法師の場合はどうか？ あの病身と、禦ふせぐことを知らない弱さと、常に妖怪共の迫害はくがいを受けている日々をもつてして、なお師父は怡たのしげに生を肯うべなわれる。これは大たいしたことではないか！

おかしいことに、悟空は、師の自分より優まさっているこの点を理解していない。ただ何となく師父から離はなれられないのだと思っている。機嫌きげんの悪い時には、自分が三蔵法師に随したがっているのは、ただ緊箍咒きんそくじゆ（悟空の頭に箝はめられていた金の輪で、悟空が三蔵法師の命に従わぬ時に

はこの輪が肉に喰い入って彼の頭を緊め付け、堪え難い痛みを起すのだ。)のためだ、などと考えたりしている。そして「世話の焼ける先生だ。」などとブツブツ言いながら、妖怪に捕えられた師父を救い出しに行くのだ。「危くて見ちやいられない。どうして先生はああなんだろくなあ!」と云う時、悟空はそれを弱きものへの憐愍れんびんだと自惚うぬぼれているらしいが、実は、悟空の師に対する気持の中に、生き物のすべてが有もつ・優者に対する本能的な畏敬けい、美と貴さへの憧憬しょうけいが多分に加わっていることを、彼は自ら知らぬのである。

もつと可笑おかしいのは、師父自身が、自分の悟空に対する優越ゆうえつをご存じないことだ。妖怪の手から救い出される度ごとに、師は涙を流して悟空に感謝される。「お前が助けてくれなかったら、わしの生命はなかったらうに！」と。だが、実際は、どんな妖怪に喰われようと、師の生命は死にはせぬのだ。

二人とも自分たちの真の関係を知らずに、互たがいに敬愛し合って（もちろん、時にはちよつとしたいさかいはあるにしても）いるのは、面白い眺めながである。およそ対蹠たいせきてき的なこの二人の間に、しかし、たった一つ共通点があるこ

とに、俺は気が付いた。それは、二人がその生き方において、ともに、所与しよよを必然と考え、必然を完全と感じていることだ。更には、その必然を自由と看做みなしていることだ。金剛石こんごうせきと炭とは同じ物質から出来上がっているのだそうだが、その金剛石と炭よりももっと違い方の甚はなはだしいこの二人の生き方が、共にこうした現実の受取り方の上に立っているのは面白い。そして、この「必然と自由の等置」こそ、彼等が天才であることの徴しるしでなくて何であろうか？

悟空、八戒、俺と我々三人は、全くおかしい位それぞれに違っている。日が暮れて宿が無く、路傍ろぼうの廃寺はいじに泊とまることに相談が一決する時でも、三人はそれぞれ違った考えの下もとに一致しているのである。悟空はかかる廃寺こそ究竟くつきょうの妖怪退治の場所だとして、進んで選ぶのだ。八戒は、今更よそを尋ねるのも億劫おっくうだし、早く家に入つて食事もしたいし、眠くもあるし、というのだし、俺の場合には、「どうせこの辺は邪悪じやあくな妖精に満ちているのだらう。どこへ行つたつて災難に遭うのだとすれば、ここを災難の場所として選んでもいいではないか」と考える

のだ。生きものが三人寄れば、皆みなこのように違うものであろうか？　生きものの生き方ほど面白いものは無い。

孫行者の華はなやかさに圧倒されて、すっかり影かげの薄うすらいだ感じだが、猪悟能ちよごのう八戒もまた特色のある男には違いない。とにかく、この豚ぶたは恐ろしくこの生を、この世を愛しておる。嗅覚きゆうかく・味覚じかく・触覚しよつかくのすべてを挙げて、この世に執しゆうしておる。ある時八戒が俺に言ったことがある。

「我々が天竺へ行くのは何のためだ？　善業を修して来世に極楽ごくらくに生まれんがためだろうか？　ところで、その

極楽とはどんな所だろう。蓮はすの葉の上に乗っかってただ
ゆらゆら揺ゆれているだけでは仕様が無いじゃないか。極
楽にも、あの湯気ゆげの立つあつもの 羹あつもの をフウフウ吹ふきながら吸う
楽しみや、こりこり皮の焦こげた香こうばしい焼肉を頬張ほおばる楽
しみがあるのだろうか？ そうでなくて、話に聞きく仙人せん
のようにただ霞かすみを吸すって生きていくだけだったら、あ
あ、厭いやだ、厭いやだ。そんな極楽なんか、真平まっぴらだ！ たとい、辛つら
い事があっても、またそれを忘れさせてくれる・堪こたえら
れぬ怡やすしさのあるこの世が一番いいよ。少くとも俺には
ね。」そう言うってから八戒は、自分がこの世で楽しいと

思う事柄を一つ一つ数え立てた。夏の木蔭こかげの午睡ごすい。溪流けいりゆうの
 水浴。月夜の吹笛すいてき。春曉しゆんぎやうの朝寐あさね。冬夜の炉辺ろへん歓談かんだん。
 ……何と愉たのしげに、また、何と数多くの項目こうもくを彼は数え
 立てたことだろう！ 殊ことに、若い女人の肉体の美しさこと、
 四季それぞれの食物の味に言い及んだ時、彼の言葉はい
 つまで経たつても尽つきぬもののように思われた。俺は魂消たまげ
 てしまった。この世にかくも多くの怡よろこしき事があり、そ
 れをまた、かくも余すところ無く味わっている奴がいよ
 うなどとは、考えもしなかつたからである。なるほど、
 楽しむにも才能の要いるものだなと俺おれは気が付き、爾来じらい、

この豚を輕蔑けいべつすることを止やめた。だが、八戒と語ること
 が繁しげくなるにつれ、最近みょう妙な事に気が付いて来た。そ
 れは、八戒の享樂主義きょうらくしゆぎの底に、時々、妙に不気味なも
 のの影がちらりと覗のぞくことだ。「師父に對する尊敬と、
 孫行者への畏怖いふとが無かったら、俺はとつくにこんな辛
 い旅なんか止めてしまっていたらう。」などと口では言
 っている癖くせに、實際はその享樂家的な外貌の下に戦々せんせん
 兢々きょうきょうとして薄氷を履ふむような思ひの潜ひそんでいること
 を、俺は確かに見抜いたのだ。いわば、天竺へのこの旅
 が、あの豚にとつても（俺にとつてと同様）、幻滅げんめつと絶

望との果はてに、最後に縋すがり付いたただ一筋の糸に違いないと思われる節ふしが確かにあるのだ。だが、今は八戒の享樂主義の秘密への考察に耽ふけっている訳には行かぬ。とにかく、今のところ、俺は孫行者からあらゆるものを学び取らねばならぬのだ。他の事を顧かえりみている暇ひまは無い。三蔵法師の智慧や八戒の生き方は、孫行者を卒業してからのことだ。まだまだ、俺は悟空からほとんど何もものをも学び取っておりはせぬ。流りゆう沙さ河がの水を出てから、一体どれほど進歩したか？ 依然いぜんたる呉ご下かの旧きゆう阿あ蒙もうではな
いのか。この旅行における俺の役割にしたって、そうだ。

平穩無事の時に悟空の行き過ぎを引き留め、毎日の八戒の怠惰を戒めること。それだけではないか。何も積極的な役割が無いのだ。俺みたいな者は、いつどこの世に生まれても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとどまるのだろうか。決して行動者には成れないのだろうか？

孫行者の行動を見るにつけ、俺は考えずにはいられない。「燃え盛る火は、自らの燃えていることを知るまい。自分は燃えているな、などと考えている中は、まだ本当に燃えていないのだ。」と。悟空の闊達無碍の働きを見ながら俺はいつも思う。「自由な行為とは、どうしても

それをせずにはいられないものが内に熟して来て、おのずと外に現れる行為の謂だ。」と。ところで、俺はそれを思うだけなのだ。まだ一步でも悟空について行けないのだ。学ぼう、学ぼうと思いつながら、悟空の雰囲気ふんいきの持つ桁違けたちがいの大きさに、また、悟空的なるものの肌合はだあいの粗あらさに、恐れをなして近付けないのだ。実際、正直なところを云えば、悟空は、どう考えても余り有難い朋輩ほうばいとは言えない。人の気持に思い遣やりが無く、ただもう頭からガミガミ怒鳴り付ける。自己の能力を標準にして他人ひとにもそれを要求し、それが出来ないからとて怒りいかつ

けるのだから堪らない。彼は自分の才能の非凡さについての自覚が無いのだとも云える。彼が意地悪でないことだけは、確かに俺達にも良く解る^{わか}。ただ彼には弱者の能力の程度がうまく吞^のみ込めず、従って、弱者の狐疑^{こぎ}・躊躇^{ちゆうちよ}・不安などに一向同情が無いので、つい、余りのじわつたさに疝癩^{かんしやく}を起すのだ。俺達の無能力が彼を怒らせさえしなければ、彼は実に人の善い無邪気な子供のような男だ。八戒はいつも寐過^{ねすご}したり怠^{なま}けたり化け損つたりして、怒られ通しである。俺が比較的彼を怒らせないのは、今まで彼と一定の距離を保っていて彼の前に余

りボロを出さないようにしていたからだ。こんな事ではいつまで経っても学べる訳が無い。もつと悟空に近付き、いかに彼の荒さが神経にこたえようとも、どしどし叱しかられ殴なぐられ罵ののしられ、こちらからも罵り返して、身をもつてあの猿からすべてを学び取らねばならぬ。遠方から眺めて感嘆しているだけでは何にもならない。

夜。俺は独り目覚めている。

今夜は宿が見付からず、山蔭やまかげの溪谷の大樹の下に草を藉しいて、四人がごろ寝ねをしている。一人おいて向うに寝

ているはずの悟空ごくうの鼯いびきが山谷さんこくに罅こだまするばかりで、その度に頭上の木の葉の露つゆがパラパラと落ちて来る。夏とはいえ、山の夜気はさすがにうすら寒い。もう真夜中は過ぎたに違いない。俺は先刻から仰向けあおむに寝ころんだまま、木の葉の隙から覗く星共を見上げている。寂さびしい。何かひどく寂しい。自分があの淋さびしい星の上にとった独りで立って、真暗まつくらな・冷たい・何にも無い世界の夜を眺めているような気がする。星と云う奴は、以前から、永遠にがだの無限だのという事を考えさせるので、どうも苦手にがだ。それでも、仰向あおむいているものだから、いやでも星を見な

い訳に行かない。青白い大きな星の傍に、紅いあか小さな星がある。そのずっと下の方に、やや黄色味を帯びた暖かそうな星があるのだが、それは風が吹いて葉が揺れる度に、見えたり隠れたりする。流れ星が尾おを曳ひいて、消える。なぜか知らないが、その時ふと俺は、三蔵法師の澄すんだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見詰みめているような・何物かに対する憫あわれみをいつも湛たたえているような眼である。それが何に対する憫れみなのか、平生は一向見当が付かないでいたが、今、ひよいと、判ったような気がした。師父はいつも永遠を見ていられる。それが

ら、その永遠と対比された地上のなべてのものさだめの運命を
もはつきりと見ておられる。いつかは来る滅亡ほろびの前に、
それでも可憐かれんに花開こうとする叡智ちえや愛情なさけや、そうした
数々の善きものの上に、師父は絶えず凝乎じつと愍あわれみの眼まな
差さしを注いでおられるのではなからうか。星を見ていると、
何だかそんな気がして来た。俺は起上がって、隣となりに寝
ておられる師父の顔を覗き込む。しばらくその安らかな
寝顔を見、静かな寝息を聞いている中うちに、俺は、心の奥
に何かポツと点火されたようなほの温かさを感じて来
た。

——「わが西遊記」の中——
(昭和十七年十一月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館